

カントの超越論的観念論についての考察：『純粹理性批判』における認識と存在の関係

朴, 修範

<https://doi.org/10.15017/1500457>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	朴 修範			
論文名	カントの超越論的観念論についての考察 —『純粹理性批判』における認識と存在の関係—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	円谷 裕二
	副査	九州大学	教授	菊地 惠善
	副査	九州大学	准教授	倉田 剛
	副査	九州大学	准教授	吉原 雅子
	副査	福岡大学	教授	岩隈 敏

論文審査の結果の要旨

本論文は、カントの超越論的哲学における認識論および存在論について考察し、その固有の意味を明らかにしようとするものである。カント哲学に関する従来の解釈史においては、カントの基本的立場を観念論か実在論かという二者択一の問題として解釈しようとするのが一般的であったが、本論文はむしろ超越論的観念論が同時に経験的実在論であることをカントの知覚概念および世界概念に定位して明らかにする。本論文は、第一部「認識と存在」(第一章から第四章)と第二部「超越論的観念論と世界」(第五章から第八章)の二部構成になっている。

まず第一章では、従来の哲学においてスキャンダルでもあった外的対象の存在問題について、『純粹理性批判』(以下『批判』と略記)第一版の「第四パラロギスムス」と第二版の「観念論論駁」との比較検討を通して、外的対象の存在に対するカントの立場を明らかにする。第二章では、「物自体」および「触発」というカント認識論の根本的アポリアについて考察し、触発とは物自体の存在を前提するという従来の実在論的解釈の誤りを指摘しながら、二者択一的な問題設定そのものの克服を目指す。第三章では、認識と存在の関係の一方の極である存在そのものに焦点を絞り、現象と呼ばれる存在者が存在そのものから区別されることを解明することによって、認識と存在に対するカントの立場をより明確にする。カントの「存在」概念の主題化から、さらに「知覚」概念の重要性が浮かび上がってくるが、第四章においてはその「知覚」概念を考察する。従来の知覚概念が超越論的観念論においてどのように捉え直されるに至るのかを確認し、存在問題における知覚の重要な位置づけを明らかにする。

第一部より、従来の一般的解釈のように『批判』の「超越論的感性論」と「超越論的分析論」のみを視野に収めるだけでは超越論的観念論の核心の把握が困難であることが明らかになる。それゆえに第二部は、「超越論的弁証論」における「世界」概念にまで視野を広げることによって、認識と存在に対する「世界」概念のもつ意義を解明する。第五章では「超越論的感性論」における超越論的客観(物自体)の真相が「超越論的弁証論」における超越論的客観(世界理念)を踏まえてこそ明らかになってくることを示す。第六章は、超越論的観念論における認識と存在の関わりに潜在的に深く関わっていた「世界」概念を主題化し、世界の認識および存在をめぐる従来の考え方とカントのそれとの根本的な違いを明瞭化する。さらに第七章においては、まさにその「世界」概念がカントの経験の理論の中で占める位置を考察し、現象の認識問題および存在問題と世界との関連を解明し、ひいては超越論的観念論と世界との関係を明らかにする。第八章においては、真理は認識と

対象の合致だという従来の考え方とは異なるカントの独自の真理概念を彼の超越論的観念論との関係から明らかにする。

以上のようなカントの超越論的観念論の解釈から次の二点を結論づけることができる。第一に、カントの経験の理論は伝統的意味での観念論でもなければ、その対極の实在論でもなく、むしろ観念論と实在論の間にこそ自らを据えるものである。第二に、カントの認識論は、経験の可能性を超越論的に問うことによって、出発点の経験から乖離するのではなく、むしろ再び経験の地平としての世界へ還帰する哲学である。本論文は、『純粋理性批判』の超越論的観念論に新たな光を投げかけ、従来のカント解釈の一面性を刷新し、カント解釈に新機軸を打ち出した業績として高く評価できる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つ者であると認める。